

◇ 国 語

国 4-1～国 4-17 まで 17 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「小説とは何か？」を考えると、私は小学校時代の二人の同級生のことを思い出す。一人は四年のときのMさんで、社会科の授業で先生が「昔」というのは、いつのことでしょう」という問題を出し、生徒全員に小さな紙に答えを書かせたときのことだ。

集まった紙を先生がパラパラ見ながら、読んでいく。「二〇年前、佐藤。一〇〇年前、山本さん。一〇年前、保坂。五〇年前、鈴木。また五〇年前、大久保……」こんな感じで続いていったのだが、Mさんの答えだけは違っていた。

「お母さんのお母さんのお母さんが生まれる前」

教室全体が大爆笑だったけれど、いま思うと、Mさんの答えだけが「小説が生まれる瞬間」だった。

小学校四年ともなると、けっこう小賢こざかしくなっていて、「社会科の授業」という枠のなかでものを考えるようになっていく。そういう小学生が「昔とはいっ？」と訊かれれば、一〇年前とか一〇〇年前とか答えるのは当然だ。

これに対して、「お母さんのお母さんのお母さんが生まれる前」というMさんの答えは、明らかに「異質」というか、はつきり言ってアタマが悪いが、そこには確実に「個」の手触りがある。あ「個」が立ち上がってくる気配がする。そして、それこそが小説の原型ではないかと思うのだ。

二人目は小学校六年のときの同級生だったW君で、卒業文集にまつわる思い出だ。全員がそろいもそろって「桜が満開のなかをお母さんに手を引かれて歩いてきた六年前が、昨日のことにように思い出されます」「四月からは希望に胸をふくらませて、中学校に進みます」なんてことを書いているなかで、W君だけはこう書いた。

「四年のとき ながしの すのこで ころんで つめを はがして いたかった。」

担任の先生は、小学校生活の思い出を書きなさいとか、将来の希望を書きなさいとは言わなかった。そんなことはわざわざ言わなくても、卒業文集にはどんなことを書くべきか、生徒は全員わかっていると先生は思っていたはずだし、現にW君以外の子

どもは先生が期待した通りの作文を書いた。

しかし、W君には「コード」が通じていなかった。そして、それでも何かを書こうとした彼は、「四年のとき、流しの簀の子で転んで、爪を剥がして痛かった」ことをもつとも強烈な出来事として思い出したのだ。小学校の卒業文集の中で、小説の書き出しに使えるものがあるとしたら、これだけだ。

この本では「小説とは何か？」について、かなりしつこく考えていくつもりだ。なぜなら、「小説を書く」とは、「小説とは何か？」をつねに考えながら進行していくべきものだからだが、ここで「小説とは何か？」について、最初の答えが見つかったはずだ。

それは、小説とは、「個」が立ち上がるものだということだ。べつな言い方をすれば、社会化されている人間のなかにある社会化されていない部分をいかに言語化するかということで、その社会化されていない部分は、普段の生活ではマイナスになったり、他人から怪訝な顔をされたりするものことだけれど、小説には絶対に欠かせない。い、小説とは人間に対する圧倒的な肯定なのだ。

しかし、書き添えておくと、三〇数年前のこの二つのエピソードは、楽しいものではない。この時期、Mさんはクラスの全員からいじめられていて、Mさんの答えを読み上げた先生の行動は、いじめを「ジョウチヨウ」することになった。W君のような作文が卒業文集にそのまま載ってしまった理由は、「生徒の個性を尊重する」という方針からでは決してなく、先生がW君を見放していたからだ。

話が脱線してしまったが、学校教育と小説（芸術全般）は、一種の対立関係にある。小説家のなかにはMさんやW君のように学校教育のスタートから疎外された子どもはおそらく一人もいないから（それどころか私はいじめた側の子どもだった）、どう言ってみてもきれいなことにしかならないかもしれないが、え、やっぱり小説家はMさんやW君の側につき必要がある。

不登校とか引きこもりのように社会で十分に「問題化」されている人たちが小説の題材にする人が多いけれど、そんなことをしてもそれぞれの教室にいたMさんやW君は疎外されたままだ。なぜなら、「問題化」されたものを見る視点に立ってしまったら、すでに「個」でなく社会の側についてしまっているのだから。

では、どうすることがMさんやW君の側につくことなのか？

私だって答えなんかないが、小説は起源に「個」があるのだから、いい小説ならきつとそれぞれの教室にいたMさんやW君を思い出させる力があるはずだと思う。思い出させることは小説だけでなく、すべての表現の力だ。思い出すこと、忘れないこと、見えなかったものを見えるようにすることには、それだけで意味があるはずだと私は思う。

^(四) 社会化されていないということでは、小説家のなかには、私のようにクルマの免許を持っていない人間がざらにいる。そういうことには平気でいられるのが小説家であり、こういう本を読むときでも、ここに書いてあることを全部マスターして、キュウダイ点を取ろうと思うようになりチギな人は小説家にはなれない。

では、この本はどう読めばいいのかといえば、少なくとも **ア** 的・ **イ** 的には読まないでほしい。私は、この本で「小説とは何か？」「小説を書くとはどういうことか？」をかなりしつこく考えていくつもりだと言った。そのプロセスは、言葉を尽くす以上、ある程度 **ウ** 的にならざるをえないけれど、読者は、私の言うことをできるだけ **エ** 的・ **オ** 的に受け止めてほしいし、そう読んだほうがわかりやすいようになっていくはずだ。誤解したり、歪めてもいいから、その人なりの **カ** で何かを感じ取ること。これが、小説を書くときにもっとも大切なことだからだ。

いま、書店には、「小説の書き方についてのマニュアル本」がたくさん並んでいて、その手の本は、小説を実地に書いていく作業を手取り足取り教えてくれるけれど、何かを **キ** 的に感じ取れるような内容の本は、高橋源一郎の『一億三千万人のための小説教室』（岩波新書）くらいだろう。小説家が書いたのもこの本ぐらいで、他は小説を書くのを正業としていない人によるものだから、 **ク** 的に感じることの重要さがわかっていない。何も感じられないまま、マニュアル通りに小説

を書いたとしても、それは小説ではない。

自分なりに感じるということは、他人の言葉を鵜呑みにしないところから始まる。たとえば私が「これが小説の中に息づくものだ」と言ったとしても、「息づくもの」という言葉をそのまま持ち歩いていては、小説は書けない。

ある人が発した言葉には、その人なりの身体性や経験が反映されている。つまり、私にとっては「息づくもの」であっても、Aさんにとっては「本質」という言葉のほうがぴったりくるかもしれないし、Bさんにとっては「音楽性」と言ったほうがピンとくるかもしれない。^五「小説を書く」とは、まずは他人が発した言葉を自分の言葉に置き換えることから始まるのだ。

(保坂和志『書きあぐねている人のための小説入門』による)

問一 傍線部A・B・Cと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ジョ|チヨウ

① ジョ|ジ詩を書く

② ジョ|コウ運転に徹する

1

③ 年功ジ|ヨレツ

④ 害虫をクジ|ヨする

⑤ 遭難者をキュウジ|ヨする

B キュウ|ダイ

① 知識がフキユウ|する

② キユウ|コウを暖める

2

③ ボーナスをシキユウ|する

④ キユウ|セン協定を結ぶ

⑤ ショウキユウ|試験を受ける

C リチ|ギ

① ギ|ダイを提示する

② ギョウ|ギが悪い

3

③ ギ|ネンを抱く

④ モギ|授業をする

⑤ シンギ|を確かめる

問二 空欄

あ

い

う

え

一つずつ選べ。

に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ

あ

① 必ずしも

② それとも

③ いかにも

④ さすがに

4

問三 傍線部(一)「Mさんの答えだけが「小説が生まれる瞬間」だった」とあるが、それはなぜか？ 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

い

- ① つまり
- ② しかし
- ③ ところで
- ④ それでも

5

う

- ① それとも
- ② そのまま
- ③ 必ずしも
- ④ いきなり

6

え

- ① 確かに
- ② いかに
- ③ そもそも
- ④ それでも

7

8

- ① 小学四年生ともなると「昔とはいつ？」と訊かれれば、一〇年前とか一〇〇年前とか答えるのは当然だ、と筆者は考えているから。
- ② 小学校四年ともなるとみんな小賢しくなっていて、「社会科の授業」という枠のなかでものを考えるようになってきているから。
- ③ 社会化されていない部分は普段の生活ではマイナスになったり、他人から怪訝な顔をされたりするものだ、と筆者は考えているから。
- ④ 「生徒の個性を尊重する」という方針に即して、先生がその作文を選んだ、と筆者は考えているから。
- ⑤ そこには確実に「個」の手触りがあり、それこそが小説の原型ではないか、と筆者は考えているから。

問四 傍線部(二)「そういう「コード」」とはどのようなものか? 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

9

- ① 先生がわざわざ言わないことでも生徒は卒業文集に書くべきだという場違いな期待
- ② W君以外の子供は先生が期待した通りの作文を書くものだという当然の理解
- ③ 卒業文集には「個」が立ち上がってくるような文章を書くべきだという人知れぬ希望
- ④ 卒業文集には小学生生活の思い出や将来の希望を書くべきだという暗黙の了解
- ⑤ 先生が思っていることを生徒は全員わかった上で書くべきだという無言の圧力

問五 傍線部(三)「学校教育と小説(芸術全般)」が「一種の対立関係にある」のはなぜか? 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

10

- ① 学校教育とは先生が生徒全員に同じ答えを書くことを要求するような社会的なものだが、小説(芸術全般)は卒業文集に書かれたような明らかに「異質」な答えを求めるものだから。
- ② 学校教育とは小学校の卒業文集の中に小説の書き出しに使えるものを探すようなものだが、小説(芸術全般)は人間に対する圧倒的な肯定であり社会化されていない部分が必要とするものだから。
- ③ 学校教育とはマニュアル通りに物事を処理しようとするような社会化を目指すものだが、小説(芸術全般)はその人なりに何かを感じ取るといった「個」の手触りを大切にするものだから。
- ④ 学校教育とは他人の言葉を鵜呑みにせず自分なりに感じる能力を養うものだが、小説(芸術全般)はその人なりの身体性や経験が反映された、自分にとって「息づくもの」を描くものだから。
- ⑤ 学校教育とはクラスの全員からいじめられていたMさんやW君を思い出させる力を持ったものだが、小説(芸術全般)はそれぞれの教室にいたMさんやW君を思い出させる力を持ったものだから。

問六 傍線部(四)「社会化されていない」行為に当てはまらないものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。

11

12

- ① “問題化”されたものを見る視点に立つこと
- ② 不登校や引きこもり
- ③ 普段の生活でマイナスになるような行動
- ④ クルマの免許を持たないこと
- ⑤ 学校教育から疎外されること
- ⑥ 「授業」という枠のなかでものを考えること
- ⑦ 他人から怪訝な顔をされたりする行為

問七

空欄

ア

イ

ウ

エ

オ

カ

キ

ク

には、「直

観・論理・感覚・分析」のいずれかが入る。最も適当な組み合わせを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

13

- | | | | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | ア | イ | ウ | エ | オ | カ | キ | ク |
| ① | 論理 | 分析 | 分析 | 感覚 | 直観 | 論理 | 分析 | 分析 |
| ② | 論理 | 分析 | 論理 | 直観 | 感覚 | 感覚 | 直観 | 直観 |
| ③ | 論理 | 直観 | 論理 | 直観 | 感覚 | 分析 | 直観 | 直観 |
| ④ | 論理 | 分析 | 論理 | 直観 | 分析 | 分析 | 分析 | 直観 |
| ⑤ | 論理 | 分析 | 論理 | 直観 | 感覚 | 分析 | 論理 | 論理 |

問八 傍線部(五)「小説を書く」ことを筆者はどのような行為であると考えているか？ 最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

14

- ① 他人が発した言葉を自分の言葉に置き換えて、「本質」という名の「音楽性」に身体性や経験を反映させるもの。
- ② それぞれの教室にいたMさんやW君を思い出させることによって、「問題化」されたものを見る視点に立つべきもの。
- ③ 小説を書くことを正業としている人が、何かを感じながらマニュアル通りに書いていくべきもの。
- ④ 本質を誤解したり歪めたりしてもかまわないが、そのプロセスは論理的な言葉を尽くして書き上げるべきもの。
- ⑤ 他人の言葉を鵜呑みにせず、その人なりの身体性や経験を反映させて、見えなかったものを見えるようにするもの。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「人間をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である」。

紙片にこう書きつけたパスカルを繻くまでもなく、人間は弱い。ほとんどの獣に素手で向かうことはできないし、蛇や百足のような小さな生き物にもひるむ。天地の異変に翻弄され、内では小さな病や心の痛手にすぐにうろたえ、ときに深く傷ついてしまう。

人間がその〈弱さ〉を知り、そのための手はずを整えるというのは、人類としてはきわめて ア な段階ですでにみられたことである。個別にではなく共同で事に当たる、安全なベースキャンプを作る、生産と分業と交換のシステムを編みだす……。

たとえば、一つの野菜を手に入れるためにも、耕作をしなければならぬ。そのために水を引いてこなければならぬ。家畜の力も借りねばならない。耕作するにはどうしても鋤や鍬が要る。そしてそれを作る職人を、さらにそのために金属を溶出する工人も当てにせざるをえない。水路を造るひと、家畜の世話をするひとも要る。もちろん、耕作するだけでは生きられない。代わりに食事を作るひと、子どもや病人の世話をしてくれるひとが要る。さらに食器や衣料や家具を作ってくれるひとが要る。その材料を作るひとも要る。それを手に入れるためには、おのれの耕作物と交換しなければならぬ。交換のためにいちいち仕事を休むわけにもいかないから、交換サーヴィスを引き受ける商人が要る。そこから得た手数料で商人たちはこんどは自身の生活財を手に入れる……。ただ耕作という仕方安定した食材一つを得るためにも、これほど複雑なひとびとの連繋と相互依存がゼンテイとなる。

古代ギリシャの犬儒派(注二)に属するディオゲネスは、何の不足もなく、何も要らないのが神というものであって、ひとは必要とするものが少なければ少ないほどそれだけ神に近づくとし、「最低生活」、つまり必要最小限の生活を理想とした。田中美知太郎はその論文「最も必要なものだけの国家」(『善と必然との間に』岩波書店・初版一九五二年)のなかで、「ただ一枚の衣を

まとい、ただ一個の袋を携えるのみで、身体が衰えてからも、わづかに一本の杖つえをこれに加えただけだと言われている」デイオゲネスに冷や水を浴びせているかのように、こう書いていた。

彼がそこにおいて、必要やむを得ないものとして、ホリウBしなければならなかったのは、いったい何であつたらうか。それは一枚の衣と一個の頭陀袋ずだぶくろ（注二）であり、なおこれに一本の杖や酒瓶や住居が加わるであろう。これは僅かなものではあるが、決して単純なものではない。彼の衣は誰が作ったのであろうか。彼はこれを何処から得たのであろうか。頭陀袋とて同じことである。またその中には、主として食糧が入れてあつたと思われるのであるが、それは何処から得られ、何人がこれを作つたのであろうか。酒瓶に至つては、私達は背後に、葡萄酒ぶどうの醸造や陶器の製造を考え、更にまたアテナイの海上貿易まで想像しなければならぬ。またその食料とても、彼が若い時に見すてて来た、黒海沿岸地方から輸入されたものであつたかも知れない。

賢者の自足性とは何であらうか。彼はそれらのすべてを自給自足しなければならないのであろうか。しかし彼は、その耕作法を誰に学び、その種子と農具を何処から得、何人の土地にそれを試みんとするのであるか。私達は犬儒派の簡易生活といえども、極めて複雑な社会的関連のうちに組織されているのを知らなければならない。かくて、私たちが到達したと信じた確実性の一点は、忽ちにして無限の複雑性をもつ延長と化してしまうのである。(三)

田中はここから、「一緒に住むこと」（シュノイキスモス）、つまりは〈共生〉を イ の条件とする人間にとって、この膨張する共生が必然的に生み出す国家社会について「最も必要なものだけ」というのはどういうことかを問いつめてゆくのだが、わたしがいま論じたいのはそういうことではない。

わたしがここで、まるで寓話ぐわのような、単純にすぎる物言いからはじめたのは、人間にとってその存在のもつとも基底的な条件とでもいべきこの〈共生〉という事態、とりわけ相互に依存しないでは何一つできない、そういう人間の〈弱さ〉が、この

社会でどれほど見えにくくなっているかを際だてたからだ。

相互依存 (interdependence)、それはあまりにあたりまえすぎる事実だと言ってよい。個人として生きるというのは、じぶんの面倒をじぶんで見るといふことだ。食べたいものを食べ、入浴したいときに入浴し、見たいものを見る。そういうセルフ・ケアが独力でできなくなるときは (すでに見たように、そういうセルフ・ケアも実際は見かけのうえではかなりたっていないのだが)、他人の手を借りるしかない。これもあたりまえのことだが、それがいまの社会のようにひとびとの協働体制がはてしなく複雑に機構化されてくると、他人の手を借りていることじたいも見えにくくなる。

調理、排泄物処理、洗濯、繕い物、看病、出産、介護、葬送、教育など、ひとの生命にかかわるもつとも基本的な営みは、かつては家族や地域の共同の営みであった。が、そのほとんどは、「近代化」の駆動とともに、家庭の外部にある、あるいは地域を超えた、公共制度やサービス機関によって代行されるようになっていった。「必要」へのかかわりを最小限にすることで個人の「自由時間」を増大させるという意味では、人類は皮肉にもディオゲネスの「簡易生活」の理想に技術の進化で応えた、と言えるかもしれない。

が、「必要」事を強いている生命上の「欠乏」がそれで消えたわけではない。震災時のようにこうした公共的なサービス機能が停止し、シャダンされると、たちまち個人のセルフ・ケアが不能になるから、やはり生命維持をめぐる最低のセルフ・ケアは独力でできる訓練をしておかなければならない……と、ここで言いたいのではない。そうではなくて、かつて家族や地域がもっていた〈協同〉の機能が、その細部まで中央管理的なシステムに吸い上げられることで急速に痩せ細ってきたという事実を言いたいのだ。それを言いかえると、「生活の標準化」というかたちで家族が国家による個人管理の細胞としての機能をはたす場へと鞍替えし、「私的なものの抵抗の拠点」としての反対ベクトルの力を削がれてゆくプロセスなのでもあった。そういう〈協同〉の営みとしての家事一つとっても、その合理化、たとえば電化、サービス商品化によって家事労働へのユウヘイからの婦人の解放を促進しはしたが、他方で女性の社会性が家事以外には非労働の場 (サークルやクラブ) でしか確認できないような状況がずっと続いてきたわけで、その点からすると、家事の外部化以上に、「協同家事」や「家事空間の共有」というかたちでい

わば〈協同〉の視点から同じ目的を追求する道があったはずだ。

〈協同〉の力を削いでゆくこのプロセスこそ、福祉政策というより大きな〈協同〉の衣をまとうこと^(四)でその実「弱い者」をさらに弱体化してゆくプロセスであった。扶養する者―扶養される者、保護する者―保護される者というかたちで、家庭や福祉施設や学校を一方的な管理のシステムとして再編成し、「弱い者」を管理される者という ウ な存在へと押し込めることになった。女性も老人も子どもも、その対抗性、破壊性をフウイン^Eされ、「可愛い」存在であることでしか安寧を約束されないという体制が社会に浸透していった。そうなりたくなければ「がんばれ」、というわけだ。

(鷺田清一・内田樹『大人のいない国』による)

(注一) 犬儒派 …

古代ギリシア哲学の一派。社会的制度や習慣を無視し無欲な自然生活を営むことを理想とした。

(注二) 頭陀袋 …

雑多な物を入れるための袋。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ゼンテイ

- ① 条約をテイケツする
- ③ 規則をテツテイする
- ⑤ 大阪にテイジュウする

- ② 企画をテイアンする
- ④ 旅行のニツテイを決める

15

B ホリユウ

- ① 容疑者をタイホする
- ③ 互いにジョウホする
- ⑤ 路地がホソウされた

- ② 商品をホジュウする
- ④ 政治権力をホジする

16

C シャダン

- ① 親子のダンゼツ
- ③ シュウダンで走る
- ⑤ オンダンな気候

- ② ダンガイ裁判所
- ④ カダンに水をまく

17

D ユウヘイ

- ① ユウグレの空の色
- ③ ユウレイを見た
- ⑤ 部員をカンユウする

- ② ユウイギな一日
- ④ 氷がユウカイする

18

E フウイン

- ① チームゼンインの勝利
- ③ ゲンイン不明の事故
- ⑤ 大学インに進学する

- ② 社長がインセキ辞任した
- ④ 書類にオウインする

19

問二 空欄 ア・イ・ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ①原始的
- ④神話的

- ②保守的
- ⑤開明的

- ③文化的

20

イ

- ①不守備
- ④不名誉

- ②不退転
- ⑤不可避

- ③不調和

21

ウ

- ①受動的
- ④必然的

- ②潜在的
- ⑤支配的

- ③主観的

22

問三 傍線部 (a)・(b) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 手はずを整える

- ①苦難に備えて覚悟を決めること

- ②感情を落ち着かせること

- ③人を集めて説き聞かせること

- ④前もって準備をすること

- ⑤最悪の事態を想定しておくこと

23

(b) 冷や水を浴びせ(る)

①能力を評価せずに、わざとその人を低い地位におくこと

②意気込んでいる人に対し、元気を失わせるような言動をとること

③相手をからかって、はずかしめを与えること

④集中している人を、突然に驚かせること

⑤口をはさんで、人の話をさえぎること

24

問四 傍線部(一)「人間は弱い」とあるが、本文中に挙げられている弱さの例として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①生命や生活を災害におびやかされること

②蛇などの小さな生き物にもひるむこと

③神仏などへの信仰心がすぐに衰えること

④病気などで精神的な苦痛を覚えること

25

問五 傍線部(二)「複雑なひとびとの連繋と相互依存」とあるが、この例として本文で言及されていないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①耕作をしている間は、自分に代わって家事を引き受けてくれる人が必要なこと

②耕作を始めるためには、まず自由にできる土地を手に入れなければならないこと

③耕作を行うときには、鋤や鍬などの農具とそれをつくる人々が必須であること

④耕作を続けるためには、自身の耕作物を別のものと交換してくれる人が要ること

26

問六 傍線部(三)「無限の複雑性をもつ延長と化してしまう」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

27

- ① 犬儒派の簡易生活といえども、実は多くの人々との関わりの中に成立していたことが明らかとなったから
- ② 犬儒派の哲学者が所持していた道具の一つ一つには、それを作成した人々の善意の思いがこもっていたから
- ③ 犬儒派の哲学者ディオゲネスの思想はとても複雑であり、その主張を理解することは現代人には難しいから
- ④ 古代ギリシャの哲学を学習するためには物理学や数学の知識も必要であり、多くの人はそれが不得手だから

問七 傍線部(四)「大きな〈協同〉の衣をまとう」で用いられている修辞法の名前を次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ① 対句
- ② 倒置法
- ③ 体言止め
- ④ 擬人法

問八 本文の内容と一致するものはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ① 現代社会においては家族の絆をもう一度確認し、再生していくことが喫緊の課題である。
- ② 特に災害時には自分で自分の身を守るためのセルフ・ケアを独力でこなう必要がある。
- ③ 女性や老人や子どもはいわゆる「弱い者」であり国家が積極的に保護すべき存在である。
- ④ 個人の「自由時間」は人間の生命に関わる基本的な営みを他人に委ねることで増大した。